

社会を生き抜くための人文学
-フランスを用いたケースメソッドの可能性-

高橋梓（近畿大学）

松井真之介（神戸大学）

山川清太郎（京都学園大学）

1. はじめに

我が国の人文系教養教育が置かれた状況の厳しさは、大学教育に携わる人間であれば誰もが実感することであろう。報告者らが担当するフランス文化教育の領域も例外ではなく、フランス語履修者の全国的な減少と連動し、フランス語・フランス文学の専修課程（いわゆる「仏文科」）の廃止が珍しくない状況にある¹。

しかしフランス文化教育は本当に社会の役に立たないのだろうか²。

たとえばフランス文学は、自分や他者の心理を理解し、社会的人間関係を分析するために有効だ。文学愛好家であれば、自身が遭遇した事件を文学作品に当てはめ、当事者の心理を慮った経験があるのではないだろうか。また、言語学は言うまでもなく他者の言語（コード）を理解し、コミュニケーションを取るために有効なものである。これは外国語に限らない。日本国内であっても、世代や職種によって異なるコードに直面し、相互コミュニケーションに苦勞した経験は誰もが持ちうるはずだが、言語学はそのような問題を解決す

¹ 伊川徹「崖っ淵のフランス語をどう救うか？」『Rencontres 17』2003年、pp. 41-43。

² このような問題提起は決して珍しいものではない。2016年にはシンポジウム「フランス文学を次世代へいかに伝えるべきか」（神戸大学）が開催され、報告者（高橋）もパネリストを務めた。

るためのヒントをくれるものであろう。多数の移民が複雑な社会を構成するフランスを分析する社会学は、マイノリティの置かれている状況を理解し、少数派の気持ちを汲み取るために有効である。移民やLGBTの問題が日常の話題となりつつある日本において、社会的な視座を養うことが意味を持つことは言うまでもない。

このようにフランス文化教育は社会的な実用性を湛えた学問分野である。とすれば我々はフランス文化教育を「机上の学問」から解き放ち、社会的実用性と結びつけるような授業を設計する必要がある。だが、フランス文化教育の実用性は「職業スキル」とは異なり、「実人生の中で意味を発揮する」という特質がある点を認めねばならない。すなわち具体的な職業に従事するための「職業訓練」としてではなく、広く社会で必要とされる汎用的技能（ジェネリックスキル³）の育成として、フランス文化教育を捉え直す必要があるのだ⁴。これこそが実用的なフランス文化教育を実現するための大きな障壁であると言ってよい。社会で起こりうるコンフリクトに備えるためには、コンフリクトをあらかじめ体験させ、解決方法を探るトレーニングが有効となるが、大学の授業内で社会問題を再現することには大きな困難が伴うのである。まとめると、フランス文化教育をはじめとする人文系教養教育が社会的実用性を欠いていると見なされるのは、「学問の形態上、受講者が社会的実用性を実感できない」ということが大きく関係していると考えられるのだ。

³ ジェネリックスキルについては杉原真晃「〈新しい能力〉と教養—高等教育の質保証の中で—」（松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』、pp.109-110）を参照。ジェネリックスキルの内実は研究者・実践者によって異なるものであるが、報告者らは特に学習者のコンピテンシー（対課題基礎力・対自己基礎力・对他者基礎力）を高めることをフランス文化教育の目的としている。

⁴ フランス文化教育とジェネリックスキルの結びつきの親和性の高さに関しては、報告者（高橋）の「プルーストとジェネリックスキル—『国際化と異文化理解』の実践例—」（『近畿大学教養・外国語センター紀要（外国語編）』第7巻第2号、2018年、pp. 67-81）で明らかにしている。

本ワークショップが取り入れるケースメソッドは、人文系教養教育の前に立ち塞がる「社会問題の再現」を解決させてくれるものである。実際の社会問題に取材した「ケース」を用いてグループ討議を行うケースメソッドは、経営学の分野を中心に注目を浴びる新たな教授法である⁵。ケースメソッドを使うと、我々は架空の社会問題をロールプレイすることが可能となる。各々がケースを通じて社会問題の中心にいることを実感した上で、具体的なフランス文化教育を行うことにより、「フランス文化を社会問題に当てはめ、解決方法を導き出すトレーニング」が可能となるのではないだろうか。つまりケースメソッド教授法とフランス文化教育を組み合わせることで、人文系教養教育を実用化するための手法を身につけることこそが本ワークショップの目的である。以降、イノベーティブ・クラスルーム・プラクティスカンファレンス2018（以下ICPカンファレンス2018）で開催したワークショップを振り返る形で、我々のケースメソッド教授法の内容を詳述することとする。

2. ワークショップ進行手順

ワークショップは3～4人のグループに分かれ、①ケース読解、②レクチャーを聴く（ジグソー法）、③ポスター制作、という流れで進む。ICPカンファレンス2018では7名の参加者を3名・4名のグループに分けた。各グループではリーダーを一人決め、意見の統一を行ってもらおう。以下、手順に従って説明を行う。

① ケース読解

参加者にはケースを通じて「語り手の視点」に同化してもらおう。

⁵ 経営学におけるケースメソッドの実践例として、高木晴夫監修、竹内伸一著『ケースメソッド教授法入門 理論・技法・演習・ココロ』（慶應義塾大学出版会、2010年）が挙げられる。近年では中原淳（立教大学）と河合塾の「マナビラボ」が、ケースメソッドを用いた教育機関のリーダー育成プロジェクトを展開している。

つまりグループ全員で「一人の人格」として動くことをあらかじめ指示し、読解を行わせる。理解を促進するためにワークシート1(参考資料参照)に記入することを課す。以下の***内に、実際に使用したケースを提示しておく。

本格中華料理店・光宮のハラスメント被害

橋本圭介(27)は憂鬱な気持ちで職場の扉を開けた。連日の残業の疲れが取れていない。しかし、そんな弱音を吐ける状況ではない。橋本の負担など、後輩の柴田智也(23)に比べたらはるかにましだからだ。柴田は今日出てくるのだろうか。

中華料理店・光宮(こうきゅう)は、本格的な中華料理を安価で提供する地元の有名店だ。地方全域に広がる外食チェーン店「はたけやま」の顔とも言うべき老舗である。以前ほどの賑わいはないにせよ、地元民に愛されたレストランである。

橋本はその地方の大学に通っていた。学生時代に半年間フランスに留学する機会があり、そこでカフェやレストランに通ううちに世界中の食生活に溶け込む中華料理に強い関心を抱くようになった。そんな経験から地元の有名企業である「はたけやま」への就職を志願したところ、幸運にも営業としての採用が決まったのだ。その研修先が有名店の光宮であった。橋本は期待に胸を膨らませて研修に挑んだが、その気持ちは一気に不安へと変わった。

研修初日、先輩社員の岸田の指揮の下、アルバイトの学生たちと一緒に勤務を開始した日のことである。厨房から怒鳴り声が聞こえてきた。アルバイトの男子学生が、料理長の中西に怒鳴られている

のだ。光宮は「はたけやまグループ」の店だが、元々は料理長の中西が始めた個人店であった。中西の役職は株式会社的には部長であるが、実質はオーナーであり、親会社の社長である畑山であっても頭が上がらない。いわば光宮のドンである中西が、男子学生を怒鳴りつけているのだ。「まったく・・・大学生は使えない！常識がないんだよ！」ものすごい剣幕の怒りを目の当たりにして、橋本は岸田に理由を尋ねた。

岸田「あのバイトが皿を洗おうとして出したときの水の量が足りなかったみたいでね」

そんな理由で？皿洗いの水の量が少ないだけで？そこまで怒るようなことか？

次の日も、その次の日も男子学生は些細なことで怒鳴られ続けた。

研修後、橋本は「はたけやまグループ」のチェーン店である安価なラーメン屋「チャイナボーイ」で四年間勤務した。チャイナボーイは有名デパートの地下にあり、忙しい職場であったが、店長やバイトとの関係は良好であり、光宮の雰囲気とはまるで違っていった。会社から支給される給料は手取りで20万ほどだったが、ボーナスも出る。シフトはデパートの営業時間に基づいているため、労働時間も常識的なものであった。この四年の間に橋本は結婚して一児の父となり、公私ともに順風満帆な日々を送っていた。そんな中、橋本は光宮への異動を告げられた。中西の元で働く――橋本はじわじわと不安がわき上がるのを感じた。

光宮への異動が決まり、橋本は勤務前に先輩の岸田のフォローを受けながら、営業部の若手としてホールでの接客と学生アルバイトの管理を担当することとなった。しかし橋本は勤務表を見て驚いた。研修の頃には十名ほどいた学生バイトが今は四名しかいないのだ。橋本「岸田さん、バイトはこれだけなんですか？」

岸田「うち、すぐやめちゃうんだよね」

橋本「なら、このバイトだっていつまで持つか分からないですよね」

岸田「いや、この子たち意外と長いんだよ。みんな二年くらい働いているんじゃないかな」

橋本「二年も！すごいですね。学生なのに、根性あるなあ」

素直に驚く橋本に、岸田は複雑な表情でこう返した。

岸田「今のターゲットは柴田君だからね。バイトはやりやすいんだよ」

柴田は勤務二年目の正社員だ。柴田は勤務初年度から光宮で働いているので、橋本はまだ会ったことがない。そして岸田によると、今の中西の「ターゲット」は柴田らしいのだ。

地元の出身で、近隣の公立大を卒業した柴田は、そのまま地元の光宮に就職した。家庭の事情で県外に出るという選択肢を持つことができず、奨学金を借りながら大学を卒業したらしい。しかも今は両親の体調がよくないこともあり、実家暮らしを続けているそうだ。

勤務初日の朝、橋本は店舗裏のロッカールームで柴田と会い、挨拶を交わして自己紹介をした。細身で長身の柴田は、どこにでもいる普通の若者といった印象だ。だが表情が暗く、口数も少ない。着替えの最中もほとんど口をきかず、そのまま厨房からホールへと消えていった。そしてその日、柴田は何度も中西に怒鳴られていた――

柴田が「ターゲット」になったのは実に些細なことであつたらしい。その前の「ターゲット」だった男子学生が辞めてしまい、しばらくは職場に平和な空気が漂っていた。そんな折に勤務を始めた柴田に不運が襲った。ホールで注文を取る作業が一段落し、柴田が厨房の掃除を手伝い始めたときである。

中西「その皿を拭いておいて」

柴田は目の前の布巾で皿を拭き始めた。それを見た中西の声のトーンが急に変わる。

中西「あ？お前、何使ってるんだ？」

柴田が手にしていたのは普通の布巾である。しかし、その布巾は厨房のまな板の隣に畳んであった布巾であった。それは厨房の作業中に使用するものなのだ。

中西「それは厨房で使うものだろ？皿を拭く布巾はそっちにあるんだよ！」

急に怒鳴り出す中西を見て、柴田はうろたえた。柴田はただ単にその布巾を厨房で使うことを知らなかったのだ。知っていたら当然所定の布巾を使うだろう。

中西「まったく、常識がねえな！お前、大卒だってな。だいたい大学なんてのはな、やることのない人間がいくところなんだよ。俺はこの仕事をやっているから大学なんて必要ないんだよ。お前みたいな人間がいるから世の中がおかしくなるんだ！そう思うだろ！？」

いきなりの剣幕に、柴田は何も言い返せぬまま立っていたら、中西はこう言い残した。

中西「お前も使えないやつだな」

そしてこの日から柴田が新たな「ターゲット」となった――

橋本は歳が近い先輩社員の佐々木から柴田のこの顛末を聞いた。布巾を間違えて使ったくらいで怒鳴り散らし、仕事と無関係な部分にまで口を出し、全人格を否定する。研修中に橋本が目にした光景とまったく同じだった。

これではアルバイトが居着くわけもない。だが、今いるアルバイトにとって「幸運」なのは、中西の矛先が社員の柴田に向かっていることだ。自分たちに矛先が向かない限り、客数が減っている光宮のアルバイトはさほど大変なものではない。

初勤務から一ヶ月、橋本は柴田が怒鳴られる様子を何度となく目

にすることになった。人間は萎縮すると、行動に余裕がなくなり、全てに迷いが生じて動きが遅くなる。客にお茶を一つ出すのも、分量はどうするべきか、持って行くタイミングはどうするべきか、お盆の真ん中に乗せればいいのか、そもそもお盆を使っていいのか…。そこで行動が遅くなったことがまた中西の逆鱗に触れ、厨房から怒鳴り声が飛ぶ悪循環に入る。

中西「お前みたいなやつは社会のどこでも使えないぞ！なあ、みんなそう思わないか？」

中西はこのように周りの人間に同意を求め、巻き込んでいく。中西の下で働く調理師の武藤と林は、職人の流儀で「親方」が言うことにうなづくしかない。また、先輩社員の岸田や佐々木も、巻き添えを食らわぬように笑ってごまかす。橋本自身も「こいつ、どうすればいいと思う？なあ、橋本！」などと振られ、その度に曖昧な笑みを浮かべるしかできない。

たちが悪いのは、それをアルバイトの学生にも強要することである。女子のアルバイトの前で柴田をなじりながら、「君たちの方が使えるね」「こんな社会人になっちゃ駄目だぞ」と言い放つ光景も珍しくない。柴田のプライドが切り裂かれる一方で、若い大学生たちは自分たちが「役立つ存在」であると告げられるのだ。彼らは中西の言葉を真に受け、柴田を見下している。つまり光宮は「一人が犠牲になれば比較的平和な職場」なのである。

アルバイトが減少した光宮ではシフトが追いつかず、柴田はもちろん、橋本、佐々木、岸田ら社員も積極的にホールに出て、注文やレジ打ち、終了後の清掃も行わなければならない。中西ら料調理師たちは翌日の仕込みを終えると帰宅するが、社員は通常の事務仕事が深夜まで食い込んでしまう。子育ては妻に任せきりになり、家族のストレスもたまっている。

だが、柴田の心労はいかばかりだろうか。中西のパワーハラスメ

ントを連日のように受け、余裕のない生活を深夜まで続けている。中西たちが帰ったあとであっても、柴田は余裕を取り戻せず、些細な作業でミスが続き、仕事は長引くばかりだ。

普通に考えると、辞めるという選択肢もある。だが中西は逃げ道を潰すように、「ここで通用しなかったら社会のどこでも通用しない」「他の店はこんなものではない」など、柴田の自信を打ち砕いていく。そもそも、少ないとはいえ正社員としての給料もボーナスも支給され、待遇はそれなりだ。柴田の家族にとっても光宮での稼ぎは欠かすことができない。

つかの間の休憩中、二人だけになったロッカールームで橋本は柴田に話しかけた。

橋本「柴田君…大丈夫？毎日こんな感じで」

柴田「いえ、仕事がもらえているだけでも…僕要領悪くて…いつもすみません」

橋本「いや、柴田君が悪いわけじゃなくてね……」

話が途切れ表情が消えてしまった柴田の顔を見ると、橋本は胸が苦しくなった。理由なく怒鳴られ、萎縮して失敗してはまた怒鳴られてしまう環境に身を置いているだけである。

柴田は悪くない。でもそう心で思っているだけではどうしようもない。このままでは柴田が潰される。もう手遅れかもしれない。なら精神を壊す前に辞めてしまえばいい——そこまで考えて、橋本は恐怖を覚えた。柴田が辞めたら次の「ターゲット」は柴田の次に若い自分ではないか？自分が柴田の立場になったら？「仕事を辞める」などできるか？子供も小さく貯金も少ない。家族は俺の給料を当てにしている。悪いのは中西なのに、なぜ自分がやめなきゃいけない？この店をボロボロにしたのは、ふんぞり返っている国王・中西ではないか？

中西をどうにかしなければいけない——だがどうする？先輩社員の岸田と佐々木は中西の性格をわかっており、内心困っていることだろう。だが年齢は中西が上である。役職は中西が部長であり、岸田も営業の部長、佐々木は係長だ。社長の畑山はたまに店に来るが、年齢は中西より下である。二代目の社長である畑山は岸田よりも若く、佐々木とさほど変わらない。先代の畑山社長が中西の個人店を光宮の系列にする代わりに三顧の礼で迎えたため、中西は二代目の畑山社長に対しても横柄な態度を取る。だが、光宮に働きかけるためには、この三人の社員と協力しなければ始まらない。

厨房はどうだろうか。調理師の武藤と林はともに四十年配で、役職は課長である。中西への反感はあるだろうが、仕事が終われば一緒に飲みに行くなど、プライベートでも交流はあるようだ。アルバイトの四名は仕事以外で社員と特に交流はない。

かつての人気店・光宮は、もはやパワーハラスメントが吹き荒れ、長時間労働を強いられるブラック企業になってしまった。「この状況を改善しなければならぬ」橋本が決意したそのとき、ふいに脳裏にフランス留学中に受けた講義の記憶が甦った——

問1 ケースを読み、「ワークシート1 ケースの要約」を簡潔に埋めてください。

問2 橋本はフランス文化に関する専門知識を利用して光宮の職場環境を改善しようと考えています。あなたが橋本なら、どんな順番で、誰と協力し、どのような方法で職場環境を改善するか検討してください。

参加者はまず個人でケースを読解し、問1に従いワークシート1

で要約に取り組んでもらう。それを参考に、グループ内でリーダーを中心に意見を統一してもらう。この作業を終えたら、参加者全体でワークシートの内容の共有を図る。備え付けのホワイトボードを使用し、各グループにワークシート1の質問内容について述べてもらう。グループによって回答にズレが生じているため、情報の全体共有を行うことによって参加者が複眼的な視点を持つことが可能となる。

ワークシート1

②レクチャーを聴く

ケース読解を通じて問題を把握した後に、ケースの語り手(橋本)がフランス留学中に受けたとされる講義を三名の講師が再現する。この際、参加者はフランス文化研究に触れることになるが、講師が行うのはフランス文化の知見を与えることのみであり、フランス文化とケースの関連付けに関しては参加者自身に行わせるよう注意する。講師が「使い方」までを指定してしまうと、フランス文化の実用性の一面のみが際立ってしまうため、参加者が自由に関連付け

を行うよう促していく。

そのため、本ワークショップではジグソー法を導入し、グループを一度解体する。それぞれのグループメンバーをA, B, Cの三つに区分する。

1グループ A B C

2グループ A (二名) B C

Aは松井のレクチャー、Bは山川のレクチャー、Cは高橋のレクチャー（各10分程度）を聴く。参加者は自分が聴いたレクチャーをもとのグループに戻って残りのメンバーに伝え、共有する。これにより、レクチャーについて参加者自身が意味を考える時間を長く取ることができ、講師の思惑を離れて参加者自身が独自の意味を見出してケースに繋げていくことが可能となる。以下、ワークショップで配布する実際の資料に基づき、***内で三つのレクチャーの内容を紹介する。

A. 松井レクチャー

（資料説明）松井レクチャーでは社会学の講義として、フランス共和主義の平等思想に基づく「市民の連帯」の考え方と、平等思想に抵触する可能性を持つ「中間集団（ここではマイノリティと置き換えてもよいだろう）の属性」との相克について、松井が近年実際に行った調査の事例や、最新の動向を挙げつつ説明した。

フランスで橋本君が受けた講義 A

講義名：Civilisation（シヴィリザシオン：主に留学生在が受講するフランス社会文化論）

テーマ：フランス革命と市民の権利

【概要】

この回では、国王とそれを支えるカトリック教会から「市民」が権力を奪取したフランス革命以降確立されてきた、フランスにおける「平等な市民の『権利』と『連帯』」の考え方を学ぶ。しかし連帯の方法や適用範囲の問題が生じている現実があるゆえ、その問題を克服するためにさまざまな適用方法の実践が試みられていることも併せて紹介する。

【橋本君が思い出した講義中の重要箇所】

現在のフランス共和国を成立させる契機となったフランス革命は、団結した「市民」たちが国王から権力を奪い取って、市民が権力の主体になったという点が重要である。そしてそのスローガンが有名な「liberté（リベルテ：自由）・égalité（エガリテ：平等）・fraternité（フラテルニテ：友愛）」である。フランス人はフランス革命で国王から権力を奪取したことをとても誇りに思っており、それは彼らが公教育において革命とその理念を丁寧に学び、実践していることからわかる。しかし、その理念はどのように社会に反映されているのだろうか。フランス人はどのようにそれを実践しているのだろうか。

その一例として、フランス人は社会の「理不尽」に対して、「市民」という単位で集団で異議を唱える、という実践が見られることが紹介された。特に労働環境における「理不尽」に対してはアグレッシブに対抗するという伝統がある。フランスは「マニフ」

（manifestation：デモ）と「グレーヴ」（grève：ストライキ）の国だと言われる。公務員、公共交通機関も頻繁に、容赦なくストを起こし、学生も起こす。ストに巻き込まれ迷惑を被る市民は、スト

に反対するどころか基本的にはストに寛容で、例えば公共交通機関のストにはライドシェアで乗り切るといった形で、ストに共感を示すという。先生が遭遇したり実際に参加したりしたマニフやストの写真、そして2018年10月から始まった「ジレジョーヌ運動」の写真も見た。これらがフランス人の「連帯 (solidarité: ソリダリテ)」の実践の形である。

そしてこの連帯の根底には「平等な市民」という意識がある。立場が一緒の「平等な市民」が、例えば経営者や国家など、立場の違うものに対して意義を申し立てたり、理不尽を被ったものに対して、平等な市民として立場を「共有」といった考えがフランス人にはある。一見反抗的だが、いつも反抗的なわけではなく、フランス的に「理不尽でない」と判断されれば、上意下達のシステムは問題なく機能する。つまりフランスでは、社会の「理不尽」に対しては、立場を共有した「平等な市民の連帯」の思想から、権力への異議申し立てとしてデモやストライキという手段によって理不尽に正面对峙することができ、しかも多くの場合は正面突破できることが分かった (結論1)。

ただ、

① 市民は本当に平等でフラットなのか？

という問題と、

② 逆に平等が行き過ぎて平等を押し付ける平等至上主義になったり、平等が自由を奪うことになったりしないか？

という問題が出てくる。

問題①に関しては、実際にはさまざまな「属性」、つまり「それぞれの立場」があるという。例えば宗教、地域、人種、民族、ジェンダーなどの属性がある。しかし、フランスではその属性 (立場) は、公の場においてはおおびらに主張してはいけない。フランス

の平等は「一個人」としてのみ保障されるという考えがその根底にあるからだ。

また、問題②に関しては、フランスで属性を主張するには、フランス共和主義に則った理屈、もしくは共和主義に抵触しない理屈が必要だということだ。この点はフランス社会に関する他の授業では聞いたことがないので新鮮だ。その事例として、先生は自身が実際に調査しているという地域語学校、アルメニア学校、イスラーム学校の成立様式を紹介していた。

地域語学校は、地域語とフランス語の「バイリンガル学校」であり、アルメニア学校も民族学校ではなく、アルメニア語とフランス語の「バイリンガル学校」である。またイスラーム学校はイスラーム教育を「オプションで」含む一般の私立学校ということだ。重要なのは、これらは「フランスの国民教育省の教育プログラムに従う、あらゆる子弟に開かれた一般の私立学校」であり、実際はその属性に属する子弟が大半だが、原則として「〇〇人」「〇〇教徒」のためだけに開かれた学校ではないということだ。アルメニア学校にアルメニア系子弟以外の生徒がいたり、イスラーム学校にムスリムでない生徒がいるという話は驚いた。しかし考えてみれば、日本の宗教系の学校だって、例えばキリスト教系の学校なんかキリスト教徒以外が大半であるし、それらと似たようなものだと考えると確かに納得できる。

ここで重要なのは、フランス共和主義の正面突破を避けつつ、その原則をうまく「すり抜ける」理屈と戦略を持って柔軟に運営されているという点だということが分かった（結論2）。

B. 山川レクチャー

（資料説明）山川レクチャーでは社会言語学として、世界における言語、日本における外国語教育、フランス国内における言語状況に焦点を当て各々の枠組みにおいて生じている言語不平等について

言及し、これらの問題を解決するためには「多言語主義」と「複言語主義」の視点を養うことを説明した。

フランスで橋本君が受けた講義 B

講義名：社会言語学

テーマ：強い言語と弱い言語、多言語主義と複言語主義

【概要】

世界では約 5,000 の言語が用いられており、ひとつの国・地域で複数の言語が用いられている例が大半である。しかしながら、その言語使用が様々な社会問題を生み出している。

【橋本君が思い出した講義中の重要箇所】

多くの国では母語以外に「外国語」として複数の言語を学ぶ。例えばフランスでは中学校からドイツ語、英語、アラビア語、中国語、日本語などを学ぶことができる。

自分（橋本君）の母国である日本では、近年、小学校での「外国語教育」が議論されている。しかしながら「外国語」は英語に限られており、大学入試でもセンター試験外国語科目は「英語」を受験する人が圧倒的多数である。果たしてこのような「外国語＝英語」という図式の外国語教育は良いのだろうか。そして、私たちは疑うことなく、この図式を鵜呑みにしていないだろうか。そこには「英語を頂点とした無自覚なヒエラルキー」が存在すると考えられる。

フランスではフランス語以外に、ブルトン語（北西部）、アルザス語（ドイツ国境付近）、コルシカ語（コルシカ島）など、さまざまな「地域言語」が存在する。しかしながら、フランスの公用語は

フランス共和国憲法第2条 《 La langue de la République est le français. 》によってフランス語と定められている。この憲法の元になったのは、1539年にフランソワ1世が司法や行政の場でフランス語を用いることを定めた「ヴィレル＝コトレ勅令」であるが、今から500年前の話であり、現在、フランスは様々な移民を受け入れ「多民族国家」の様相を見せている。フランスの公用語がフランス語だけで良いのだろうか。ここではフランス国内における「フランス語を頂点とした無自覚なヒエラルキー」が存在するのではないだろうか。

このような問題を解決するには「無自覚な暴力」をやめること、つまり「ヒエラルキーの平坦化」である。その方法として「多言語主義」と「複言語主義」を考えると良い。

- 多言語主義…一つの地理的地域に二つ以上の言語変種が存在する状況の中で、その社会レベルの言語的多様性を尊重・促進していくこと
- 複言語主義…一人の人間の中に複数の言語能力があり、現実の場において必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する状態

つまり、多言語主義の観点では、「同じ国に住む人の多様性を尊重することが必要」であり、複言語主義では「様々な価値観を認め、必要に応じて臨機応変に対応する能力が必要」なのではないか。

権威的な言語が力を発揮する中で個人はどうすればよいのか。多言語主義と複言語主義の立場から、

- 多言語主義が尊重される社会をつくる…ブログ・SNS投稿、デモ、政治家への陳情などで社会に訴える。

- 言語多様性に対応する能力を持つ…自らが複数の言語を習得し、必要に応じて臨機応変に対応する。

などを考えることができる。

C. 高橋レクチャー

(資料説明) 高橋レクチャーではフランス文学(マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』)の心理描写に着目した授業を行う。実際に作品から引用を行い、要点を箇条書きでまとめている。自分と社会階層が異なる人物との間に心理的な距離があることで、相手の存在が神話化される、という事例を先行研究に基づいて説明した。

フランスで橋本君が受けた講義C

講義名：フランス文学概論

テーマ：マルセル・ブルースト(1871-1922)の『失われた時を求めて』に見る社会学的テーマについて

【概要】

ブルーストの代表作『失われた時を求めて』は、19世紀～20世紀のフランスを舞台として、小説家を目指す「私」の人生が綴られる。主人公「私」はパリの裕福な家庭に生まれ、サロン(夜会)で貴族社会の凋落やブルジョワジーの躍進を目にする。

【講義中の分析箇所】

幼い頃、パリ近郊の田舎町コンブレーで復活祭の休暇を過ごす主人公「私」は、貴族階級のゲルマント公爵夫人に強い憧れを抱いている。教会のタペストリーに描かれた神話上の人物にゲルマント公爵夫人を重ね、一目会いたいという思いを強くする。だが、とある結婚式のミサで本物のゲルマント公爵夫人を目にすると、「私」の

憧れは霧散し、幻滅を感じるのだった。

< 第一篇、『スワン家の方へ』 >

私たちは皆、私がどうしても行きたかった散歩道の終着点、つまりゲルマントまで足を伸ばすことはなかった。私はそこに、館の住人たち、つまりゲルマント公爵夫妻が住んでいることを知っていた。ゲルマント夫妻が実在の人物であることは知っていたが、彼らのことを考える時にいつも私が思い浮かべるのは、教会にある「エステル」の戴冠式」の中のゲルマント伯爵夫人のように、タペストリーに描かれた人としてである。(RTP, I. 169)

⇒ ゲルマント公爵夫人＝エステル（旧約聖書「エステル書」）

※ コンブレの「エステル」のタペストリーはゲルマント家の祖先であるゲルマント伯爵夫人をモデルにしていると言われている。

結婚式のミサの最中に、突然、守衛が身体を動かした拍子に、礼拝堂に腰掛けているブロンドの婦人が目に映った。大きな鼻で、鋭く青い目をしている。首に巻いた絹のスカーフはモーヴ色で、なめらかで新しく輝いているが、鼻の脇に小さなできものがあつた。〔…〕ゲルマント夫人の肖像写真にそっくりで、夫人がやってくるまさにその日に礼拝堂にいるのだから、この人はゲルマント夫人に違いない！私の失望は大きかった。(RTP, I. 172)

⇒ 実際のゲルマント夫人を目にすることでの失望

【プルーストの社会学的読解】

- 異なる社会階層……自分とは別世界
- 自分の世界と異世界の間横たわる「心理的距離」

- 「距離」が対象を神話化し、幻想を発生・持続させる。
- 現実を知る→神話の崩壊→失望 ※距離の消失

【まとめ】

『失われた時を求めて』を「幻想」と「現実」の差異を知った主人公が「現実」に立ち向かう術を模索する物語として再解釈することができる。社会的地位の格差による心理的距離によってもたらされる畏怖の念は「幻想」であり、相手をよく知ることで解消されるものである。

【使用テキスト】

Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, tome 1, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1987. 引用に際してはRTP, I.という略号を使用し、ページ数を付した。

【参考文献】 ※本テーマをもっと知りたい人のために

Pierre-V. Zima, *Le Désir du mythe. Une sociologie de Marcel Proust*, Nizet, 1973.

阿部宏慈『プルースト 距離の詩学』平凡社、1993年。

これらのレクチャーをまとめるためにワークシート2を用いる。レクチャー後、参加者はもとのグループに戻り、自分なりのまとめを他のメンバーに伝える。これらの手順を踏むことで、グループメンバーの中で語り手（＝橋本）の人格が形成される。

Asurwin Project 2018 <https://asurwin-project.com> 2/54

ワークシート 2 フランスレクチャー

必要に応じてこのワークシートにレクチャー内容をまとめてください。

- あなたが受けたのはどんな講義ですか？（タイトル、テーマ）
- 講義はどのような内容ですか？（トピック、分析の視点、導き出された結論など）
- 本ケースの問題解決のために、この講義内容のどのような部分が活用できそうですか？

所属 _____ 氏名 _____

ワークシート 2

③ ポスター制作

各グループが三つのフランス文化レクチャーとケースの関連付けを行った後、ケースの間2（橋本はフランス文化に関する専門知識を利用して光宮の職場環境を改善しようと考えています。あなたが橋本なら、どんな順番で、誰と協力し、どのような方法で職場環境を改善するか検討してください）を行う。1時間ほどの作成時間が取れる場合は模造紙と付箋を使用して、じっくりとポスターを作ってもらうが、ICPカンファレンス2018のワークショップは90分尺であり、ポスター制作の時間は20分ほどであった。そのためワークシート3を利用し、参加者の作業手順を明確化することで時間短縮を図った。

3/3

ワークシート3 個人→グループ共有

	STEP 1	STEP 2	STEP 3
	レクチャーで最も重要なことは？	問題にどのような対応ができるか？	対応の具体案は？
社会レクチャー (松井)			
言語レクチャー (山田)			
文学レクチャー (高橋)			

グループ メンバー

8

ワークシート3

A, B, Cの箇所はレクチャーを受けたメンバーが担当し、それ以外に意見があるものは付箋で加筆する。講師はファシリテーターとしてポスター制作を補助する。

完成後、このワークシートを壁に貼り、参加者全員でグループ発表と質疑応答を行う。終了後はリフレクションシートを用いてワークショップの学びを各自が文章化し、定着を試みる。

3. 成果と課題

本ワークショップのポイントは、講師はレクチャーを通じてフランス文化研究の知見を与えることに特化し、ケースへの関連付けを参加者自身が行うことにある。そのため参加者はフランス文化の実用化について常に試行錯誤を繰り返さねばならない。

たとえば松井レクチャーにあるフランス式ストライキを日本に直接導入することは無理がある。講師がそのためのヒントを提示することは可能だが、あえてそれをしないことにより、参加者自身がフランス文化を日本の文脈に合わせようと議論を繰り返す。それにより、講師すら想像し得なかった方法が生み出されることも少なくない。言い換えれば、フランス文化研究は「画一的な実用性」をはるかに凌駕する様々な可能性に満ち溢れた学問なのである。本ワー

クシヨップの参加者から回収したリフレクションシートには「人文系の知識を活かす経験を短い時間で経験できた。」「全ての事はやり方や繋げ方次第で繋がることを自分の口から伝えていきたい。」との感想があった。これはフランス文化研究に大きな可能性が残されていることの証左であると考ええる。

他方で参加者がフランス文化研究を日本的文脈に落とし込む中で、解決策が単純な一般論に終始する例も多く見受けられる。ポスターには毎回のよう「飲み会を設ける」「職場の先輩に相談する」といった、フランス文化の知見に基づいたとは思えない対処法が散見される。言い換えると、我々はフランス文化を日本文化の中に取り込む中で、「日本的な発想」の根深さに直面していると言えるだろう。ワークに取り組む中で、日本的な発想をいかにして参加者に客観視させ、フランス文化の知見を社会に役立てていくべきか。その答えは引き続き模索していきたい。

